

『鮎川義介 回想と抱負』（稿本, 3）

UDAGAWA, Masaru / 宇田川, 勝

(出版者 / Publisher)

法政大学経営学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei journal of business / 経営志林

(巻 / Volume)

42

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

115

(終了ページ / End Page)

126

(発行年 / Year)

2005-10-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004934>

〔資料〕

『鮎川義介 回想と抱負』（稿本，3）

宇田川 勝

日米戦回避への努力

渡米の機を逸す

まずドイツに行く

やがて、昭和14年の秋となった。ときの内閣首班は、阿部信行大将である。この約2年の歳月というものは、私にとって、まさに一日千秋の思いであった。もはや事態は、一刻の遅疑をもゆるさない。幸い時間の経過もちょうど頃合いだとおもったので、第2回の渡航をくわだてたわけだが、このときには外務省の横槍で、さしとめを食ってしまった。

このころになると、軍部の内外を問わず、いわゆる独伊派とよばれた一派の勢力がだんだんとつよくなり、当時霞ヶ関におった大橋忠一も、あるとき、そっと「鮎川さんは、アメリカ資本の導入に力こぶをいれているようだが、よほど注意しないと、独伊派にやられる心配があるよ」と耳打ちしてくれたほどだから、外務省がこれらの一部勢力にうごかされて、私の渡航計画をぶちこわしたのも、これは充分ありうることであった。事実、私自身は気がつかなかったが、そのころ私の身边には、会社の手で、ひそかに護衛までつけられておるといふ始末であった。

私のなやみは、こうして日ましにふかまるばかりであったが、かといって、ただ悶々の内に貴重な時を空費することは、なおさらたえがたいことであった。事態がここまできた以上、満州国の産業開発が空まわりすることだけなら、まだしも目をつむってがまんするとしても、日米関係がうまく軌道に乗らないかぎり、ついには日本という国が、運命の坂を転落しはじめることに、ならないともかぎらないと考えたからである。

目的を貫徹するための忍苦は、くるしいことに

はちがいなかったが、このくらいのことで私は決して万事休すとは考えなかったし、運命の糸をあやつる女神もまた、私にたいする試練をここで打ち切りにはしなかった。

たまたま、ある日新京で駐満ドイツ公使ウィルヘルム・ワグナーに会ったときのことである。同大使は私にむかって、こういった。

「ドイツはついに戦端をひらいた（1939（昭和14）年9月1日、ドイツ軍ポーランドへ侵入、同3日、イギリスは対独宣戦を布告、これが第2次世界大戦への糸口となった——編者注）。けれども、その生産力には充分な余裕があるし、輸送問題にしても、ドイツとソ連との関係からすれば、シベリア鉄道を利用することによって、かなりの能力があるとおもうから、このさい、ぜひとも向うへ行つて、ドイツの実情をみてきてほしい。」

もちろん、私はこの言葉をききのがさなかった。元来、私はドイツの技術などというものには、それほど魅力を感じておったわけではなかったが、このときのワグナー公使の言葉から、ある一つの考えが私のあたまにひらめいたのである。

「よし、この機をとらえて、ドイツ行きを口実に、ソ連をおとずれ、さらにイギリス経由でアメリカに渡ろう。」

さいわい、ときの駐独大使は、かねて親交のあった来栖三郎である。そこで、早速準備にとりかかったわけだが、前述のように、私の渡航については、これまでも計画の都度、じゃまがはいって沙汰やみになり、世間的にもすぐ妙な目でみられる心配もあったので、このときは、すべてを極秘のうちに運んだ。

当時、シベリア通過ということは、非常にむずかしいとされておったが、こんどは外務省もたいへん骨を折ってくれ、申請後わずか2、3日しかたたない昭和14年12月21日の夕刻4時ごろ、ソ連

の査証が電報で駐日ソ連大使館にとどいた。こんなことは、まったく前代未聞の話だということであったが、私は文字どおりその夜を徹して、なにかと留守中の手筈万端を片づけ翌22日暁闇をついて羽田空港を飛びたったのである。

途中、満州国政府その他の関係筋との打ち合せも、とどこおりなくすませ、昭和14年12月26日には新京出発、満州里から汽車でシベリアに入ったのは、年の瀬もつまった28日の夜8時であった。

お正月はシベリア鉄道の車中でむかえ、昭和15年1月4日モスクワ着、ソヴェート政府当局の非常な好意により、2日間滞在して6日同地出発、オデッサ付近を通してルーマニアに出て、ブカレストに2泊、ハンガリーからウィーンを経て、1月17日ベルリンに到着した。

ドイツでの歓待

ベルリンにおける歓迎はたいへんなもので、当時ドイツにおった日本商社の人たちも、こんな歓迎ぶりは、いまだかつてみたことがないと、日々におどろいておったほどであった。ドイツ側では、かねてワグナー公使などからの報告もあって、私がドイツびいきだと思いこんでおったことも、こうした歓迎の理由だったにはちがいないが、さらにもう一つには、彼等が満州の大豆を非常に欲しがっておったということがあったわけだ。

それまで、ドイツでは、植物性油脂として、満州大豆のほかに、インドの落花生とか、南洋方面のコブラなどの類を輸入しておったのであるが、もうこのころでは、落花生やコブラなどの輸入は杜絶し、たのみの綱は大豆だけ、しかもほかの植物性油脂とはちがって、これがなくなれば、なによりもまず鶏や牛の飼糧になる粕にこと欠く。鶏が育たなければ、卵もとれず、牛がいなければミルクもとれないのが道理だ。いわば、ドイツにとって必要不可欠の大切な物資、ところがその満州大豆さえ、ぼつぼつ入り渋るような状態になってきておった。

そこで、私の訪独を機会に、ドイツの実情をよく見せた上で、機械類とのバーターによって、大豆輸入の道をひらきたいという下心から、大げさな国賓待遇をしたものと察せられた。つまり「大豆を得んと欲せば、まず鮎川を射よ」というわけ

だったのだ。

そうしたいきさつがあったものだから、一般軍需工場であれ、重爆撃機の製作工場であれ、大佐級の軍人が案内して、工場主にむかい、「もっとよく見せてあげろ」などと命令するほどの丁重大なあつかいをうけた。工場を視察すると、そのあとできまって、そこの首脳から感想をもとめられたが、私はそのたびに、すこしも飾らず遠慮もせず、思うところをズバズバいってのけた。それがまた、彼ら自身かねてから自覚しておるところにふれたものとみえ、「さすがは鮎川、満州開発という途方もない大事業を、一手にひきうけるだけの達人である」などといっておったそうだ。

そんなこともあって、おもしろいことには、おもだった工場主たちは、自分の工場が私の視察日程からはずされることを、なにか工場の格下げでもされるようにおそれ、社長とか専務とかいった連中が、ひっきりなしに遠方からおしかけてきて、ぜひ自分のところも見に来てくれというさわぎになり、とうとう50にもなる工場を、くまなく歩きまわされることになってしまった。

しかし、そうしておるあいだにも、私としては、内心、もう気が気ではない。このときの私の旅行のほんとうの目的は、前にも述べたように、いつまでものんきに、ドイツの工業などをみてまわることにあつたのではないのだ。もっとも、表面上の理由はそうなっていたのだから、むげにふりすててゆくわけにも行かなかったが、心の中では「一時もはやくここを脱けだし、イギリス経由でアメリカへ」とはやりにはやっておったのである。

じつは、このころすでに、随行の三保幹太郎は私の旨をうけて、モスクワから単身オスローを経て、英京ロンドンに飛び、さきに駐日イギリス大使館の商務参事官をしておったホールパッチをたより、イギリス資本の導入についていろいろ調査画策をはじめており、同時に、当時アメリカに駐在しておった久原光夫（久原房之助の長男）とも連絡をとって、同地からの情報をうけながら、私の渡米の下準備をすすめておったのである。

2月8日、鮎川はやっとベルリンをたち、ミュンヘン方面を視察して、13日にはスイスに入り、チューリッヒ、ベルン、ジュネーヴを経て17日ローマに到着、ここで三保と連絡をとりながら、ひた

すら渡米の機会を待つことにした。その間約3週間ばかり、ぼんやり待っておるのも能がなさぎると考えて、時間のゆるすかぎり、イタリア国内をあちこちと視察しておったが、そのあいだにも久原からの情報は、しぎりにアメリカ国内における対日空気の極端な悪化をつたえてきた。

時も時、ちょうどイギリス経由でアメリカから帰国の途次、ローマに立ち寄った日本水産役員の白州次郎をつかまえて、いろいろ話をきいてみると、「アメリカ国内の情勢は、非常にわるい。こんなときに渡米しても、結局むだではないか」という。

そうしたところへ、こんどは来栖大使から、ヒトラー総統に会えることになったから、この際は渡米を見合わせて、もう一度ベルリンへ引き返してきてはどうかとやってきたので、私もついに意を決して3月2日、ふたたびドイツの土をふんだ。

来栖大使の忠告

このとき、私を迎えた来栖は、ひそかに耳打ちをして「外資をアメリカ一点ばかりで行くのは、非常に賢明な策だ。しかし、現在の情勢では、これを達成するには外交の転換にまつほか望みはない。そのうちに必ず好機が来る。が、それまでは仕方がない。残念ながら隠忍自重しなさい」といった。外交の転換、好機必至といった、このときの来栖の言葉は、なにを意味したか。

(1) 独ソの不可侵条約は、昭和14年8月21日に締結されたが、その直後のある機会に来栖がヘルマン・ゲリング元帥にむかい、「かつて後藤新平伯は、ドイツの地政学者で、ヘス・ルドルフ（ヒトラーの副官）の先生にもあたるハウスホーファ博士にたいして『日独ソはたとえていえば、三頭立ての馬である。いっしょに曳かなければ車がひっくりかえる』といったことがあるが、あなたはこのことをどう考えるか」ときいたところ、ゲリングは言下に、「いっしょに曳くにしても、ソ連を中央におき、日独両国がその両側で高等馬術をつかう必要がある」と答えたこと。

(2) 当時の駐ソ連大使が、来栖大使にたいし「独ソ不可侵条約が出来たからといっても、

ドイツは私になにも知らせてくれない」と嘆じたこと。

(3) 不可侵条約を結んだのちも、独ソは各々国境の軍備を増強しておったこと。

以上のような事情から、来栖大使は、独ソ不可侵条約はけっして永続きはしない、というより近くかならず破れる時がくる。そのときこそ、日本はなにもよけいな心配などすることなく、ドイツをアメリカに乗りかえることができると考えておった。こうして、日米の親善関係を回復すれば、おのずから日華間の紛争を調整できるチャンスをつかむことも出来るし、またソ連とのあいだに後顧の憂いを残さぬことにもなるというのが、来栖の考え方であった。

つまり、このとき来栖大使がいだいておった外交意見としては

(1) 独ソ不可侵条約は、早晚破綻の運命をたどる見通しがついておること（事実、1941年6月22日にいたって、両国は戦端をひらいた）。

(2) 日本は太平洋に波風をたてないこと。

(3) 日本はソ連と仲良くすること。

この三拍子さえそろえば、日本はぜったい安泰というのであり、これこそ私にたいしても「ちかいうちに好機必至」と耳うちしたゆえんであった。

私は、この来栖大使の言葉をきいて、すっかりその卓見に感服し、私の念願としてきた対米外資の問題も、この線にそって動くべきであると考えたので、三保だけをロンドンからアメリカに渡らせ、自分は来栖のいう「必至」の機をまつこととして、ここに帰国を決意したわけであった。

その後、私がヒトラーにあったのは、まったく儀礼的な意味からであったが、その人となりがいわゆるドイツ人ばなれしたものであったという点と、彼の長時間におよぶ演説も、裏長屋のおかみさん連にさえ飽かれずに耳をかたむけさせるといふ非常にすぐれた話術の持主であったという点で大いに感心した。

結局、この旅行ではついに所期の目的を達成することができず、結果的にはドイツを視察して帰ったという形になったわけであるが、じつは私が実際にこの眼でみて、その工業力というものからは、あまり大した感銘を受けなかった。ゲリングとの

初対面のとき、彼はドイツの工業力の偉大さを大いに印象づけようとして、だいぶ御自慢のようにみうけられたが、私はそれにたいして、ただ一言、次のように答えただけであった。「工業といえば、おそらくアメリカの方が、もっともっと進んでいるでしょうな。」

対ルーズヴェルト工作

アメリカからの情報

昭和14年9月3日、英独開戦の当初から、アメリカは陰に陽にイギリスを援けておったが、そのために、一方では太平洋で日本との間に事をかまえることを極力さけようとする気運もあり、私はもとよりこの情勢をみのがしはしなかった。

そこで、私はひとり欧州からアメリカに渡った三保幹太郎をたえず督励し、自分もいつかはルーズヴェルト大統領に会うことが出来るようにと、画策を怠らなかつた。当時、三保から頻々と送って寄越したつぎのような情報連絡の内容をみると、そのへんの事情がよくわかるとおもう（とくに発信人を明示しないものは、三保発鮎川宛のものである。いずれも暗号電報の翻案による——編者注）。

◇昭和15年6月20日后2，23ニューヨーク発信、6月21日前6，5受信

日米両国の関係如何は、いろいろの意味で最近ますますその重大性をくわえてきました。このさいアメリカ大統領が、自発的に個人的使節を日本におくる最良の策なりとする大統領近親の銀行家および政治家が出てきました。これは当方にとってまことに好都合のこととおもいますが、うまくまとまるよう祈っております。まだ具体的に御報告するまでにはこんでおりませんが、とりあえずおしらせいたします。堀内大使に話すのもまださしひかえております。お気づきの点御指図乞う。

◇昭和15年6月26日后4，08ニューヨーク発信、6月27日前8，29受信

加藤公使7月2日、日枝丸にてたち、15日につきます。公使着早々御会談ください、その結果をすぐ当方までおしらせねがい、その模様によってそれを当地の人に知らせた上、

サンフランシスコまで飛び、19日の龍田丸でかえります。

フォードの問題は立消えになったかと思いますが、おついでに御内報ねがいます。

◇昭和15年6月26日后7，31ニューヨーク発信、6月27日前11，44受信

日本内地の政情も刻々変化し、わが国もいまや外交上の岐路にたちおることと思います。アジアにおける日本の地位を確保するには、いまがもっとも好時期であると思います。しかしこれがため、ことさらアメリカと正面衝突をまねく必要はなく、日米両国とも外交的にいろいろ工作する余地が大いにあると思われる。

1. 北支独立
2. 中南支開発
3. 仏領印度支那（以下、文字不明——編者注）
4. 蘭印における石油その他の物資獲得にたいする実際的方法
5. 日米通商条約
6. アジア開発のためのアメリカの投資にかんする当方の要求を忌憚なくあらかじめ相談づくでまとめておけば、将来アメリカと面倒すくなくなり、すべて円満にはこび、結局東亜建設の終局の目的を、いそがずあせらず、達しうると思います。アメリカもイギリスを保護するために、日本を味方に入れたい立場に追いこめられ、日本にたいしてあまり文句はいえない情勢になりつつあるのに乗じ、この際ぜひとも外交的にも勝利を得て、話の筋の通りよいようにし、それによりソ連とも協調のできる体制に出て、東亜大陸と北南米大陸とがおたがいに経済的に協力し、繁栄を期するという筋書で、「日本」の方針をまとめうれば、彼方は案外簡単に話合いがつくと思われます。ただし11月の選挙までは表面に発表せず、密約とすることももちろん、これは「日本」の突撃および「イギリス」がそれまでがまんし、持ち堪え行けぬ情勢も予想

に入れて、機宜対応せねばならぬと思われます。

ディロンの意見

◇昭和15年7月1日前3, 37ニューヨーク発信,
7月1日后7, 08受信

ワシントン政府筋および銀行家も日本の外務省だけのいうことでは納得せず、どうしても軍の奥書きがなければ相手にしません。この点で総裁も頭をなやまされておられるかと思いますが、その最近の模様もお知らせ願います。したがって、なるべく大統領またはその近親のものから仕掛けさす機会をつくるよう努力が必要ですが、これはなかなかまわりくどい方法です。総裁はむしろ日本の軍の使者として、大統領のブレーン・トラストと下相談するということにとりはこばれれば、大統領との会見はむしろかしくないと思います。もちろん国務省（ウエルズ・ハル）とあらかじめ打ち合わせる必要があります。要するに、アジアモンロー主義の要求の限度、とくに軍の意見をたしかめうる見当さえつけば、その具体的促進方法は、情勢に即応し、ただちに実行にうつせると思われます。

◇昭和15年, 7, 3前4, 14ニューヨーク発信,
7月3日后7, 51受信

けさ9時ディロン氏（金融界の大御所）との会見の結果、同氏のいうには、「欧州戦争にたいして、日本がアメリカと同様の態度をとるといふ決心さえつけば、支那の問題は英・米・仏に関するかぎり、これを永久にかたづけることができる。かつまた香港、インドシナ、蘭印の方も、十分日本を満足させるようにとりはからえる。イギリスは目下すべてをアメリカにまかせきっているから、支那にかんするイギリスの方針は、アメリカの指図通りになる国務省対外務省の普通外交ではだめではあるから、この方は自分が自身で乗りだす。オライアンには話しても役にたたぬからあまり深入りせぬこと。」

私どもがディロンと話をすすめていることは、西山財務官、堀内大使など、誰にも明かしておりません。ディロンの名はぜっ

たいに総裁のみ含みおき願います。あまりあちこちにニュースが散らばってはだめと思います。ディロンのパートナーであるフォレスト氏が最近大統領のブレーン・トラストになっておるなどの関係もあって、モルガンとならんで、非常な潜勢力をもっており、かつ別に裏面工作を施しうる筋合になっております。したがって大統領と会見打ち合わせなどのことについて、ぜんぜんご心配なきよう願います。

モルガンはイギリスとの関係が濃厚で、反日的でありましたから、日本のためにはたきません。ディロンはルーズヴェルト、ウィルキーいずれにても話ができるようになっております。日本の方針さえきまれば、アメリカからすぐに密使をおくることもできます。いまが干載一隅の機会と思いますが、軍の意見を早くきめなければ、機会は逃げ去るでしょう。この際、米・英にたいする軍の要求条件の大綱を書きつらね、至急電信願います。

世界のいろいろの情勢を冷静に考え、いま、アメリカを利用することが、支那問題を解決する上にもっとも有効な方法であって、また将来の開発に役立ったと思います。アメリカとしても、いまが日本に対して百八十度転回しうる機会であり、おたがいに面子の問題も解決するわけになります。ぜひともいまの潮時を逃がさぬよう、潜行的御奮闘を神かけてお願いいたします。これが日本ののるかそるかのわかれめと思います。

この電信のなかに、オライアンという名前が出てきたから、注釈的に一応ここで述べておくこととする。

オライアンというのは、ジョン・F・オライアンのことで、第1次世界大戦のころには、かなりその名をしられた将軍であった。日本経済連盟会で、アメリカの大統領に話のできるような人物をまねいて、日満の実情を見させることがきわめて得策であるという見地から、当時大蔵省にいた迫水久常に相談をもちかけ、在米西山財務官に斡旋を依頼した結果、このオライアンが来日したわけ

である。

当時三保から私によこした書信によれば、「オライアンという男は、対独休戦論者だから、この際どうも日本の外交問題を混乱させる心配が多分にある」ということであつた。それでも、私は、なにぶんにも国内その筋のきもいりもあることから、ひきまわし方しだいでは、かなりの芝居がうてるかとも思つたのであるが、これは結局とんだ期待だおれにおわってしまった。

グルー大使との折衝

グルー大使に会う

ことの順序として、ここでまた、話を私の国内における秘密工作にもどしておく必要があるようだ。

ヨーロッパへの旅から歸つた私は、一旦自分の手にまかされた満州の重要産業開発の仕事を、1日もはやく軌道に乗せるためにも、また日華事變の進展しだいによっては、米資導入の手がかりを失ひ、ひいては祖国日本の歴史に、ぬぐうことのできない汚点を印する結果をまねくかもしれないという心のあせりから、ただ漫然と、いわゆる「必至の好機」を待つ気には、どうしてもなれなかつた。来栖大使の至言は至言として、これと両立することのできるようなことなら、やってみてわるかろうはずはない。

そこで、ちょうど米内内閣のときであつたが、かねて知り合いのアメリカ・リパブリック・スチール会社の日代表兼東京トラスコン会社社長であつた米人口バード・F・モスの紹介で、駐日アメリカ大使ジョゼフ・C・グルーに会い、極東問題の解決策について、いろいろと懇談をとげた。

その際、私はとくに、ここでぜひともルーズヴェルト大統領に、じきじきに会いたいから、なんとか大使の力でとりはからってもらいたいと、誠意をこめてたのみこんだ。私の話をじつときいておつたグルー大使は、ついに私の信念にうたれ、もえるような熱意にうごかされたのであろうか、さっそくその内容と私の希望とをくわしく國務省に通報して、その指示を求めてくれた。

この事実を念頭において、アメリカの三保から依然頻々としてうたれてきた次の電信連絡の内容をよく読んでもらいたい。

◇昭和15年7月9日前3、10ニューヨーク発信、7月9日后7、14受信

当地祭日、日曜などのため、よく相談もできず、おくれます。もし總裁の渡米をすすめた場合、その出発以前に、軍との間に相当の了解がつけられるかどうか、それが心配です。こちらに渡ってきてから、軍をひきずり込むという戦法もいはいけれども、それでは一層時候おくれになってしまうおそれがあります。軍の代表も内密に同伴されるつもりかどうか。思いつきの点、急ぎおしらせ乞う。

◇昭和15年7月9日前3、10ニューヨーク発信、7月9日后7、20受信

こちらの國務省を抜きにして、大統領から直接グルー大使にたいし、それとなく總裁のことを聞きあわせするかも知れません。小生の意見として、總裁はアメリカとの通商条約、ことに機械などの必需品買入については、日本として最適の第一人者であつて、満州支那問題でも軍と関係の深い旨を申し述べておきました。おふくみお願いします。

◇昭和15年7月11日前3、07ニューヨーク発信、7月11日后7、00受信

大統領と会談される件は、（以下、文字不明——編者注）こちらの下ごしらえもできました。もし必要ならば、外相・総理にたいし、總裁は大統領と十分に連絡があると申されても大丈夫になりました。

加藤公使はワシントンでは齋藤大使以上に評判のよい人ですから、支那問題・通商条約問題などの関係もあり、總裁に同伴するよう話をむけられるのも、一方法かとおもわれます。總裁宛小生の電信は加藤氏にみせられても、差し支えありません。急用のため渡満されとのことですが、困ります。いつごろ帰京されるか、お知らせ乞う。この地では、大統領近親者の緊急重要懸案になりつつあるやさきに總裁渡満のことを知らせるのは不得意と思い、加藤公使着早々相談すると申してあります。日本の外交政策が急激に積極化し、変化しつつある折柄、一層の御奮闘をいのります。こちらでも相談の結果、小生龍田丸乗船帰国の件はひとまず見合わせます。

グルー大使のメモランダム

この7月11日の三保からの電報をみて、同日午後7時、私はつぎのように三保あてに電信しておく。

「情勢デリケートにて、この地の軍にわれわれの工作を打ち明け、相談するわけにいかぬこと残念なり。しかし、大統領がイニシアチブをとって、鮎川を招んだ形がととのえば、それをたねにしてものにできる可能性あり。われ、あす立ち陸路渡満、関東軍の諒解をうる目的にてあたってみるつもり。」

奇しき一致とでもいうか、アメリカにおける三保の軌掌の模様を実証する神意とでも考うべきか。この両者の電信交換のあった日の翌12日付で、グルー大使から、鮎川あてに次のようなメモランダムがとどいた。さきのグルー・鮎川内談にたいする反応であった。

日米関係について、数カ月前貴我論談の結果、小職は貴下の御意見をアメリカ政府に報告しました。政府においては興味をもって貴下の御意見を検討し、貴我両国間の提携促進に寄与せんと貴下の願望に多とするものであります。貴下は極東における時局の公正にして満足なる解決——関係国すべてにたいして公正にして満足なる——の実現の可能性あることを信じおられ、なおまた貴下自身合衆国を訪れて、親しくアメリカ官辺にたいし意見を開陳すれば、貴下にとって有用な目的に役立つかもしれぬという考え方にかなむいておられる次第でありますから、貴下におかれては、右の所信に副うて、この際渡米を考慮されるお心持ちもあることでしょう。もし貴下がこのような旅行を決意せられるならば、小職の感じとしては、その場合アメリカ官辺が、さきの貴我会談における題目について、よろこんで貴下と論議すべきことをお請合いのできるであります。貴下がやろうとしておられることを十分に知っていない小職として、政府が貴下のなされんとする示唆にたいして、どのような反応を示すかということについて、あらかじめ意見を申し述べることはもとよりできないことであります。なお、ここに小職の見解を申し述べましたが、右は貴下から当局に披瀝すべき示唆に対して、アメリカ政府がとること

あるべき態度にかんし、政府もしくは小職として、なんらの責任を負う意味でないことを御諒承下さい。

東京 1940年（昭和15年）6月12日
ジョセフ・C・グルー

満州国承認問題

このメモランダムは、私にとってまさに天来の福音というべきであったが、いかんせん、このころ、もはや軍内部の情勢と右翼の攻勢とは、鮎川を束縛して、その自由をゆるさず、長恨ついに長蛇を逸したのである。

「アメリカにより満洲国の承認」と「満洲国への巨額の米資導入に」かんしては、機会あることに私みずからこれを表明し、その達成を期していたし、また三保をしてバーナード・バルーク翁はじめ、彼地における政、財界の有力者をくどかせておったのであるが、このことが直接アメリカ側のおおやけの機関とのあいだで折衝されたのは、グルー大使との会談における私の言説が最初であり、また駐米大使として赴任する野村吉三郎や、日米交渉における補佐役として軍部からの特派された岩畔豪雄大佐などにたいしても、鮎川からその必要を強調しておったのである。それだけでなく、岩畔については、昭和16年3月6日、彼がアメリカに向って出発した直後、私は三保にたいし、「最近まで軍事課長であった岩畔大佐が、野村大使の補佐官としてちかく渡米するので、例の問題について貴下と小生との申し合わせをよく説明し、ぜひとも貴下とアメリカで会って、最後の手をつつようにすすめたところ、岩畔大佐はこれを承知し、貴下がヨーロッパとアメリカ双方の真相をつかんでいるという点を重視して、もし必要であれば、貴下の逗留方を松岡に請訓するように打ち合せておいた。なお、岩畔は陸軍きっての智者で、本部をうごかす腕前の人だから、胸襟をひらいて対応するように。」と電報をうった。

日米交渉の発端は、昭和15年11月29日、当時産業組合中央金庫理事井川忠雄が、帝国ホテル滞在中の米国カトリックの最高学校メリノールの事務総長で、カトリック神父監督補助ドラウト師から、日米関係の改善について会見したという手紙を受けとったことにはじまる。そして、交渉の前提と

なった両国国交の調整についての話し合いは、日本側では岩畔大佐と井川忠雄、アメリカ側ではドラウト師、メリノールのビショップのウォルミュ師およびドラウト師らとルーズヴェルト大統領との間の連絡者であったカトリック信者の郵政長官ウォーカー、この5人のあいだではじめられ、日米交渉の基礎案となるべきものの起草したのは岩畔、井川、ドラウトの3人であった。

この草案が、日米双方当局の検討を経て、改訂をくわえられ、昭和16年4月17日に請訓された、いわゆる「日米諒解案」となったのであって(矢部貞治編著『近衛文麿・下』参照)、この諒解案のうちに、「満州国の承認、および、両国間の経済的提携促進のため、アメリカは日本にたいし、東亜における経済的状態の改善を目的とする商工業の発達および日米経済提携を、実現するにたる金クレジットを供給するものとす。」という二つの事項が、まさしく取りいれられておるのである。

この諒解案を受け取った日本政府では、東条陸相も武藤軍務局長も、大よろこびではしゃいでいたといわれ、陸海軍もたちまちこれに「飛びついた」とつたえられておるようだ。来栖大使の言葉をかりていえば、「軍部は手を打ってよろこんだ」そうであり、矢部貞治編著『近衛文麿』には、大橋外務次官も「世界の運命を左右するようなものだ、ろうばいしたよろこびであった」と記されておる。

思えば、私が「満州国承認」と「満州国への米資導入―日米経済提携」をアメリカ側のおおやけの機関にはじめて要望したのは、昭和15年早春のことであり、私の意志が日米交渉の折衝にあたった野村大使や岩畔大佐にも通ぜられていたのであり、日米交渉の発端が同年11月29日、そしていわゆる「日米諒解案」なるものが請訓されたのは、越えて翌年の4月17日となっておる。ここに私の信念と日米諒解案中の前記二事項との深い因縁があったわけであるが、しかし、すべては真珠湾の奇襲によって水泡に帰した。私が天をあおいで、終生の恨事となげいたのも故なしとしない。

日米交渉の失敗と松岡

日米交渉がついにまとまらなかったことについては、ここに二つの説がある。日ソ中立条約をも

のにして、「おつぎは日米関係の解決だ。これもおれの手でやってみせる」とばかり、意気揚揚と帰国した松岡が、その第一歩を印した立川の飛行場から宮城にむかう自動車のなかで、はじめて省外の人たちの手によって準備された日米諒解案が請訓された事実を知って、にわかにかんむりをまげ、交渉の進展をはばんだことが害をなしたという説と、松岡が妨害したからではない、これは満州国承認などということをおとりにして、日本をひきずりまわしたハルの謀略にすぎなかったのだという説がある。

しかし、岩畔大佐の出発にさいし、松岡は「ちかく渡欧して、独伊との国交をさらに強化し、ソ連との関係を改善したいと思っているが、その上で日米の国交、とくに支那事変の解決をやりたいから、君は渡米したらその端緒をつくっておけ」といっておること(矢部前著)。

松岡がソ連をおとずれた際、アメリカの駐ソ大使シュタインハートにむかって、「ルーズヴェルト大統領にして、真にギャンブルを好むならば、この際日本を信じ、日支和平実現のため、一役買って出るべきではないか」といって、米大使から大統領にすすめてくれ」と説いた。そして、松岡はひそかに、それが実を結ぶことを期待していた(同上著書ならびに来栖氏の談話による)。

4月22日午後2時すぎ、立川飛行場へ松岡の乗った飛行機が到着した。新聞社のカメラや映画のニュース・カメラの一斉射撃をうけて、松岡はいと上機嫌で降りてきた。この人気スターにたいする種々の歓迎行事があつて、いよいよ帰りの自動車に乗る段になったら、松岡は当日すぐ参内することになっておるにかかわらず、その前に二重橋で皇居遥拝をしたいといい出した。もちろん、数十台のカメラマンの車もついていって、その情景をとるわけである。松岡はそういうことに、非常な魅力を感じる人物であつたということ(矢部前著)。

彼は実に頭の明敏な人であつたから、人が馬鹿にみえてしょうがなかったらしい。実際、彼にくらべたら、たいがいの人は馬鹿であつたろう。外務次官の大橋忠一は、一度、ある問題で彼に「馬鹿」とののしられた。しゃくにさわれた大橋は「自分だけ利巧だと思ふものこそ、ほんとうの馬鹿だ」とやりかえしてやったと書いている(大橋

忠一著『太平洋戦争由来記』)。

以上のような断片的な事実からみても、松岡という男は、よほど自信の強すぎた人、いいかえれば「おれが」という気持ちの勝った男だという世間のうわさや、銜気の張った人だという批判に、まんざら根もない悪口とも思えぬ。だから、中立の第三者が、松岡がかんむりをまげたために、交渉がだめになったとする前説にかたむくのも、これはやむをえないようである。同時にグルー・鮎川会談や、三保の活躍にたいするアメリカ朝野の反応ぶりなどから考えると、すくなくとも問題の二点が諒解案に盛られたころまでは、アメリカ側がこれをおとりにしたなどと、かんたんにいつてのけるわけにも行かないように考えられるが、どんなものであろうか。

日米諒解案を接受した政府が、軍部をもふくめて、喜色あふれたというあのときの勢いで、交渉がすすめられていたならば、おそらく、昭和16年7月の南部仏印進駐という事態も起らなかったであろう。南部仏印進駐が、日米交渉の転機となり、アメリカが極度に硬化したということは、近衛公の手記にも、大橋の『太平洋戦争由来記』にも認められているところである。グルー・鮎川会談が、その一年余も前の事実であり、ドラウトの井川訪問が同じく半年前であることをおもうとき、いまさらに、感慨無量なものがある。

日米交渉の成立一日支和平の実現—世界平和の招来。

この希望が夢と化し、現実には誇示されたものは原子爆弾の威力であった。

神よ、人々の心から「自我の名利」をとりのぞかせたまえ。

私は、ただこう祈る。そうでさえあれば、前記の異論など、はじめからあり得ないのである。

梅津関東軍司令官への上申

とにかく、私は一生懸命に努力した。そのかくれた努力のなかから、悟りえたものは、国内国際諸情勢当然の帰趨として、日米国交調整については、どうしても公式の折衝が必要であること、その時期は早ければ早いほど効果的であり、交渉の時間は短いほど日満妥結の可能性がつよいということなどであった。

そして、私は、短時間のうちに妥結をはかるには、当時閣外にあってなお政界に重きをなしていた近衛公と、ルーズヴェルト大統領の直接会談を実現するのが最上の策だと結論し、昭和15年6月29日、実質的に満蒙監督の最高責任者である梅津関東軍司令官に、つぎのような上申書を提出した。

上 申 書

康德7年6月29日

満洲重工業開発株式会社

総裁 鮎 川 義 介

梅津関東軍司令官閣下

外資問題に付御願

康德3年秋、鮎川は板垣参謀長の招聘に応じ全満を視察の結果、当時関東軍の創意により作製せられたる全体主義国防産業計画案の実行方策につき、忌憚なき愚見を徴せられたる際、かくのごとき龐大なる産業開発、なかんずく重工業の総合的拡充整備を、日本の非常時において、急速に実現せんがためには、まずその国柄を考慮し、敢然大陸式経営の建前をもって邁進するの要あり、この意味において、満州はすすんで工業先進国と提携し、ひろく世界によびかけ、優秀なる技術と、豊富なる資材とを選択動員することのきわめて緊要なることを説明せることあり。翌年北支事変突発後まもなく、日満両国政府において、満州重工業開発会社創設の議成り、その確立要綱中においても、外国の技術設備とともに、つとめて外資の導入をはかることは、本会社設立の要件として、とくに重きをおくべきものなりとの御指示ありにつき、鮎川はこの旨を体して重大使命の遂行を期し、営々として画策し来りたるも、時うたた利あらず、ひたすら好機到来を翹望しつつ今日に及んだのであります。

しかるに、いまや欧州戦局の急変により、米國はいたく国防の不安におそわるるものあるに反し、日本は一躍世界安定勢力としての優越地位を得るにいたりたるためか、このころ米國の対日態度一転し、すでに彼我の国交調整も、本格的に進展せんとする機運せまれるもののごとくかわる。しかし、両国間新関係の樹立

せらるる場合に想到すれば、日滿は東亜大陸および太平洋一帯の安定を保障すべき大役を、一手に引き受くることとなるべく、この場合、米國にたいし、その裏付として經濟問題にかんしても、相当思いきりたる注文をもちださうべき筋合にありと思料せられます。

ついで、日本政府において、いよいよ対米協定の商議をすすめる場合には、ぜひとも滿州の外資問題を、左記条件のもとに織り込まれんことを、願望してやまない次第であります。

1. 滿州国政府は、滿洲の産業開発に要する機材と技術との購入代金に充当する目的をもって、まず10億ドル程度の外資公債を発行すること。
2. 米國政府は、責任をもって斡旋し、当業者をして前記滿州国ドル貨公債を引き受けしむること。
3. 米國政府は右公債の手取金をもって購入せらるる機械と技術との円滑なる供給を保証すること。

以上

なにとぞ微衷御諒察、右達成につき御詮議の上、関係方面にたいし、しかるべく御執成たまわりたく、謹みてお願い申し上げます。

この上申書の文中、とくに傍点を施した部分は、非常にふくみのあるところで口頭で具陳した意見の内容を、この言葉で示唆督促しているのである。

しかし、こうしてひそかに私が謀った近衛・ルーズヴェルト会談も、なかなか思うようにはすすまず、ついに年を越してしまった。そして、さきに述べた昭和16年9月の伊藤文吉の邸における近衛・グルー会談は、いわば両巨頭会談にたいする針路を変えた私の秘策の一手であったわけだが、アメリカでつづけられていた日米交渉の成行きは、周知のとおり、こうした企図をもついに水泡に帰せしめることになったのである。

伊藤文吉男のうごき

昭和15年7月16日、米内内閣が総辞職して、組閣の大命がふたたび近衛に降ったとき、伊藤文吉男は輕井沢に近衛公をたずねて、私を外務大臣に奏薦するよう進言した。ところが、元来、近衛公

は外交というやつがあまり得手ではなかったので、これを松岡にまかせようと考え、すでに交渉をすませて本人の内諾を得たあとだったから、いまさらどうするわけにも行かないということになった。

むろん、私はいわゆる大臣病患者ではないが、それまでにも、じつは兩三回ほど入閣の交渉をうけたことはあった。私の信念としては、一つの仕事をやりとげるのに、大体10年にかかる。だから、もし陛下が私の地位を10年間保証してくださることなら、就任してもよいが、1年や2年でまた内閣が変わって、やめなければならぬようでは、とてもほんとうの仕事など出来るものではないから、おことわりするというのが、私のいつのも言分であった。

しかし、あの場合だけは、日米の交渉をまとめるのに、10年かかるというわけではなし、また10年もかかっていては、それこそ大変である。もしあのとき、私が外務大臣になっておれば、渡米することもできたであろう。すでにアメリカにたいしては、かねて三保を動かし、またグルー大使を介して、かなりの基礎もつくってあったことだから、こちらから出かけて行って、大臣の資格における直接交渉は、おのずから重きをくわえて、成立の可能性も非常に濃くなったはずであった。

もともと、伊藤男はその生前、私とは心ゆるしたあいだがらで、私の重要な仕事のかげには、かならず伊藤ありといわれておった。野村大使がそのアメリカ赴任前、私と会談したのも伊藤邸であり、近衛公がルーズヴェルトとの直接会議をもくろんで、昭和16年9月6日グルー大使と極秘に会議したのも同邸であった。これらの事実といい、伊藤男の輕井沢行きといい、いずれも私との密接な連絡にもとづいていたことはいうまでもなかった。

ジェームス・W・マレーの電報

ジェームス・マレーという人は、かねてから私をよく知る米人の一人である。グルー大使から私あてにメモランダムがとどいたちょうどそのころ、ある新聞に、私が駐米大使に擬せられているという記事が載ったことがあった。これを知ったマレーは、昭和15年7月31日ニューヨークから私あてに「貴下が駐米大使の職を受諾されることは、当

地の有力筋にも貴下にたいしてふかい尊敬をもっているものもあるので、両国間を一層良好な関係にみちびくものと信じます。このはなはだ重要な時機に、貴下がその地位を引き受けることが出来るのを切望するものです。」

という電信によせて、私の大使就任について、その真情を吐露してくれた。この電報によっても、三保の活躍ぶりがよくうかがえるが、それについても、前に述べた近衛・伊藤の榎井沢会談が筋書通りにはこんでいたら、あるいは???という悠目な推測もうまれてくるわけである。

日米戦争回避策

満州国への米資導入という一件が、一つにはこれを世界平和の礎石にしようという私の意図から出たものであることは、しばしば述べたが、私はその後もずっと太平洋戦争の勃発直前まで、執拗に戦争回避の努力をつづけた。

政府部内ですでに万策つきたと考えるにいたったそのときでも、私はあくまで希望をうしなわず、東条首相あての上申書を草したのである。そのときの上申書のうつしは、その後どこへやったものか、私の保存文書のなかにはみあたらず、相談相手であった青木一男をわずらわしてずいぶんさがしてもらったが、とうとう出て来なかった。ところが、昭和26年12月になって、信濃毎日新聞社取締役会長の小坂武雄氏がこれを手写保存していることがわかった。つぎにかかげたのは、その小坂会長の手写とその奥書である。

青木一男 鮎川義介両氏起草

日米戦争回避策

昭和20年10月20日手写

小坂武雄

昭和20年9月30日夕刻、青木一男氏が在妻科の拙宅に来訪せられ懇談の際、もし戦争犯罪人として連合軍指令部より召還せらるる場合、自分は平然出頭して、大戦勃発直前、鮎川義介氏と共に日産館の二階にて起草せる私案を示し、かつ陛下がいかに平和を御軫念あらせられたかを力説するかんがえなり。右私案は自分の方にては焼却せしも、鮎川氏に保存しありたり。当時、鮎川氏はこの草案をたずさえて、七度東条首相

を訪問力説せしも、ついにきかれざりき。また当時憲兵より拘引せられざりしは、行為者が自分および鮎川氏なりしためなるべしとかたられたり。

こえて10月20日、青木氏は信毎本社に余を訪問せられ、先般語りたる草案はこれなりとて示さる。余これを借覧、手記しおけるものなり。原文は紀尾井町鮎川氏より代々木大山、青木氏宛て送達の封筒に入りたるままなりき。

試案

昭和16年11月23日

1. 満州国および蒙疆は現在通りの方針を踏襲することとし、日本の至上指導権を米国は承認すること。
 2. 支那をして世界列国に対し門戸を開放せしめ、産業上通商上の機会均等主義を文字通り徹底せしむること。したがって、従来の外国租界はこれを全廃し、今後かくのごとき特殊区域を設くるがごときことなきものとす。
 3. 支那における抗日的言動の取締と抗日思想の根絶を確定的ならしむる方策として、支那全土にわたり鉄道を一元的経営管理におき、これが支配権を日本の手中に収むることとし、鉄道網の警衛を完備し、これに日本の駐兵をおこなうこと。
- 右に関し、日本は将来事態の推移に徴し、順次撤兵をおこない、いよいよ日本がその必要なきを認むるにいたりたるとき、支那に前記支配権を移譲するものとす。
4. 米国は支那の反日を招くがごとき一切の行為を停止すると共に、蔣・汪の提携につき斡旋工作をなし、日本と協力して支那の政治独立完成にむかつて全面的支援をあたえること。
 5. 樺太、カムチャッカおよび沿海州ならびに満州接土をソ連より切りはなし、無防備の後衛的中立国を形成しむること。
 6. フィリピン、仏印その他南方諸領は地域的環境に即応し、適宜独立国群を構成せしめ、軍備はすべて絶無となし、あらゆる方面に機会均等主義を発揮実行せしむ

ること。

7. 以上日米両国間確約成功の上は日本は独伊等の樞軸より手をひくこと。ただしこの場合、日米通商条約を復活するはもちろん、満洲蒙疆および支那の開発に資するため50億ドルの借款に米国は応諾するものとす。
8. 本協定にもとずき、日米親善復興の上は、百尺竿頭一步をすすめて日米は過去の経緯を水にながし、あらたに強力なる太平洋聯盟結成の中核となり、これによって一挙に太平洋の波浪を沈静ならしめ、東亜の風雲を一掃せしむるの功を収め、引続き世界の大平和を誘致することにつき救世的役割を果し、ひいて地球上戦争の禍根を絶滅せしめ、ついに八紘一字の大理想達成にまいしんせんとす。

本案は昭和16年11月23日、三保幹太郎、青木一男両氏の参助を得て作成せる草案なり。

当時軍部の対米外交態度はなはだ意に充たざるものあるを憂え、本案を武藤軍務局長に提出して東条陸相の周到なる考慮をうながしたるも、残念ながら不成功におわりたり。

鮎 川 義 介

右タイプされた私の前文および青木、鮎川両氏起草の試案は、当時私の手写しておいたものと少しも相違ありません。

当時衆議院議員

信濃毎日新聞社長

現 信濃毎日新聞社取締役会長

昭和26年12月29日記 小 坂 武 雄